



妖怪



隠れん坊

川崎ゆきお

「つまらん依頼じゃ」

妖怪博士は、そう呟きながら木枯らしの吹く屋敷町を歩いている。町名は屋敷町だが、今はそれほどではない。私鉄沿線の町で、戦前出来た高級住宅地だ。電鉄会社が売り出した。

しかし、家が建ち始めた頃は敷地の広い家が多くあり、屋敷と言える家も多数残っているのです。町名と合わないわけではない。その一軒から妖怪博士は依頼を受けた。

「屏風の後ろに何かおるのですね」

「そうです。幽霊ではなく、妖怪だと思う。動物に近い」

十畳の居間に屏風が立っている。その後ろは壁で、その隙間に道具類や雑雑とした物が置かれている。ぼろ隠しのようなものだ。

その屏風は六枚ほどからなり、鳥獣戯画が描かれている。当然本物ではなく、プリントしたものを貼り付けているのだろう。そのため、かなり拡大されており、兎や蛙が大きく見え、本物の兎ではないかと思えるほどだ。

「どんな妖怪ですか」

「後ろに隠れているのです。音を立てたりします。また屏風が動いたりも」

「鳥獣戯画の動物が動いたりするわけではないのですな」

「絵は動きません。絵は問題ではなく、屏風の後ろに隠れているのです。何か」

妖怪博士は屏風の後ろを見る。半畳ほどの奥行きがあり、家電品の段ボールや紙袋、そして使わなくなった蚊取り線香などが雑然と置かれている。そのとき、屏風に触れてみると、簡単に揺れた。

「片付けないといけないのですがね、一時置き場です」

「それで、目隠しに屏風を」

「いや、これはわしが観賞するため、壁際に立てたのです。いつの間にかぼろ隠しになってしまいました」

「鼠がちょろちょろしているんじゃないのですか」

「もう少し大きいです。大型犬ほどはありそうな」

「見ましたか」

「いえ、その大きさの気配が」

「それが妖怪だと」

「はい、妖怪が屏風の後ろに隠れているのです」

「隠れん坊という屏風の後ろに隠れる妖怪がおります。絵が好きな小坊主です」

「やはり、いますか。なるほど」

「子供ですから、まあ大型犬の気配に近いかもしれませんなあ」

「退治する方法は」

「そのままでもいいでしょ」

「しかし」

「隠れておるだけです。こんな屏風を使う家は減りましたからなあ、屏風不足です。だから、いい場所を見つけた隠れん坊が棲み着いたのでしょ」

「何をしているのですか。その妖怪は」

「だから、隠れておるだけで、それ以外のことはしません。人畜無害です」

「ほう」

「妖怪隠れん坊は屏風にはつきものでしてなあ。隠れん坊に選ばれた屏風は誇ってもいいのです」

「誇る」

「気に入った屏風にしか出ません」

「そう思う。この鳥獣戯画屏風はよく出来ておる」

「妖怪に気に入られたのですから、名誉なことです」

「わしは飾っておるだけだ」

「これを見つけ出したあなたの眼識が高かったのでしょうか」

「褒めていただいて嬉しいです」

「だから隠れん坊が出る屏風は自慢してもよろしい」

「それを聞いて安心しました」

「この屏風を大事にすることですなあ」

「はい、有り難うございます。妖怪博士」

妖怪博士が必要以上に屏風を褒め称えたためか、謝礼は思った以上の額だった。

貰うものを貰い、妖怪博士は屋敷町を歩いている。

「つまらん依頼じゃが、こういう話なら、定期的にもっとあったほうがいいのう」と、呟いた。  
木枯らしの中、今日の妖怪博士の懐は温かい。

了